



コスタリカ共和国 草の根技術協力

「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業活動報告」

No. 20

2017.5.15

～準備と振り返りの重要性～

NPO 法人イフパット 研究員 宮崎 雅之
(現地調整員/生活改善ファシリテーター)

Hola! こんにちは。日本での一か月の業務を終え、再びコスタリカに戻ってきました。コスタリカは、ちょうどセマナ・サンタというキリスト教に由来する祭日週間を終えたところで、私が到着したのがその連休明けだったため、オロティナのファシリテーターチームもまだまだお休みモードが抜けていない様子でした。そんな中、他国からの視察団受け入れ、今後の活動計画の会議が行われ、活動振り返りの重要性を再認識することとなりました。

■農業分野の勉強会スタート

サンタリータ村の住民が望んでいた、家庭菜園・学校菜園をする上で必要な農業の基礎知識の勉強会が、農牧省の技術者ハビエルによって開始しました。以前のオロティナ市の農牧省担当者も何度か、勉強会を試みましたが、指導方法が住民に寄り添ったものではなく、自分の知識を淡々と教える講義だったため、指導が独り歩きしてしまい、住民が置いてきぼりになっていました。それに対し、今回指導に当たったハビエルとは、第一回目の住民との集まりで、すぐに技術指導するのではなく、住民が何を既に知っていて、どのような事を学びたいかということを確認する質疑応答形式の話し合いの場を設け、それ以降の勉強会の内容を決めました。ハビエルと話し合った結果、まずは畑に関しての「土の中の一生」というビデオを流すことにしました。インターネット等で様々な情報が飛び交う現在、家畜の糞を利用した堆肥で育てた野菜は汚染されていて人体に悪影響を及ぼす、コーヒの粉を植物の周りにまくと蟻や虫が寄ってこない、台などに土を入れて高いところ

で野菜を栽培しないとナメクジが野菜に付着して、それが病気の原因になる等、何を根拠にしているかわからない情報が住民の中に錯そうしていました。それらの疑問について、土がどのように出来るかを丁寧に説明したビデオを通して1つ1つ紐解いていきました。また、ビデオを一気に流すのではなく、所々一時停止をして質疑応答の時間をとりました。ビデオの質問や今まで住民が抱いていた疑問に対して、その原因の解説や対応策を伝えて、1人1人の課題を解決していきました。その結果、いままでわからなかったことや知りたかったことが鮮明になり、住民のモチベーションが目に見えるよう向上しました。まさに住民のニーズに呼応して技術指導がしっかりできた瞬間でした。

■エルサルバドル視察団、MAG実証プロジェクト対象集落サラピキグループ受け入れ

生活改善アプローチの活動が始まってから約1年が経過して、少しずつグループとして形になって来た中、他の中米諸国からモデル集落への視察団、またコスタリカ内の他の生活改善グループからの訪問が実現しました。中米エルサルバドルからの視察団計16名（13名の市長および3人のFISDL（社会開発庁）の職員）による市役所訪問およびモデル集落訪問が行われました。モデル集落住民からは12名のメンバーの参加があり、生活改善を通して、これまでに学んだことや成果の発表がありました。また、その翌日にはMAG実証プロジェクトのサラピキ地域の生活改善ファシリテーターチームおよび集落グループの受け入れが行われました。サラピキグループからは35名の参加、オロティナのモデル集落住民からは11名のメンバーの参加があり、各集落住民による活発な意見交換がありました。

2日間とも訪問者による家庭訪問があり、メンバーによる家庭における改善の発表が行われました。

- ・生活改善活動のおかげで物事を前向きに考えられるようになった。
- ・使っていない洗濯機浴槽を堆肥作りに活用したい、土を入れて野菜を植えたい。
- ・栽培についての知識をつけて、現在の家庭菜園をより収穫率の高いものにしたい。
- ・他の集落住民にも参考になるようなモデル家庭菜園にしたい。

などなど、これまでに改善して来たこと、これからの展望などを訪問者に説明をしていました。まだ改善に取り組めてないメンバーも、これからの計画についての話があり、今回の家庭訪問がモチベーション向上のきっかけとなりました。

今回は大きなグループの初めての受け入れであったため、ファシリテーターチームの準備不足が目立ちました。スケジュール管理や担当振分けといったことはもちろんのこと、訪問の主旨の共通理解、この訪問を通して、モデル集落にどのようなことを感じてほしいのかといった部分が抜けてしまい、訪問を受け入れることが目的となってしまいました。次回の受け入れでは今回の反省を生かせるように、ファシリテーターチーム内での事前準備、振返りを綿密に行いたいと思いました。

■合同調整委員会設置

プロジェクトマネージャー永井の来コスタリカに合わせて、合同調整委員会第一回の会合が開催され、副市長のベンハミンにより委員会の設置意義の発表があり、出席者全員で内容の確認を行いました。その後、全関係機関代表（オロティナ市役所、地域開発庁、保健省、農牧省、IFPaT）による署名式が執り行われ、「生活改善アプローチによる農村開発モデル事業プロジェクト合同調整委員会」が正式に発足しました。また、ファシリテーターチームより、今後の活動方針の説明があり、各機関から重要なプロジェクトドキュメントであるPDM（プロジェクト計画マトリックス）バージョン1.0策定の合意を得ました。特に、プロジェクト目標については「住民の生活の質が改善し「住居」、「健康」、「栄養」、「教育」、「子育て」、「家計」及び「家族関係」が向上する」と、新たに「住居」を加えました。

そして、協力機関として、JICA コスタリカ支所から支所長含む2名の出席があり、活動への助言等々、引き続きオロティナ市役所と連携していく姿勢を示して頂きました。今回の合同調整委員会の設置により、ファシリテーターチームの活動やコミュニティでの成果を、次回以降の会合で評価、振り返りが行われることとなります。より効果的かつ効率的な活動が期待されます。

それだはまた次号で。¡Hasta luego!(アシタルエーゴ)



写真 1、2：合同調整委員会の第一回会合



写真3：オロティナ市の作成したコミュニティでの生活改善活動のポスター



写真4、5：農牧省職員による農業に関する技術指導



写真6：エルサルバドル視察団によるモデル集落グループとの交流